

# 大好きな山の近くに住みたい…、 そんな願いに応えたログの家

木

質  
感

暮  
ら  
し

の  
あ  
る

6

長野県安曇野市

興石邸



●マシンカット・ログハウスには珍しく、妻壁は漆喰に。これは興石さんの「左官仕上げにしてほしい」という希望で実現したもの。ログ壁とのコントラストがとても美しい。また、窓の顔縁を白く塗装することで、単調になりがちな壁面にアクセントが生まれた。なお躯体は、大阪のスオミインターナショナルがフィンランドより輸入したもの。

●土地の気候を考えると、玄関には高窓室がほしい。ところが興石さんの「玄関を入れてすぐに吹き抜けの部屋を」という希望をかなえようとすると、玄関ドアを開けてすぐにリビングになってしまう。そこで考えられたのが、在来による玄関室を組み合わせる方法。セトリングの少ないマシンカット・ログハウスだからこそ可能になった施工だ。

●「いらっしゃい!」。デッキのハンモックから興石さんが声をかけてきた。



いつかは山に住みたい…  
それがきっかけだった

森の奥の一角に、目指す興石邸は建てていた。周囲の自然に溶け込むように仕上げられた外壁の塗装と白い妻壁、そして大屋根を持つ外観は、まるでずいぶん前からそこにあるような印象を与えてくれる。

「いらっしゃい!」。

デッキのハンモックで本を読んでいた興石さんが声をかけてきた。聞けば、ふだんこのハンモックはお嬢さんの住

奈江さんの指定席だとか。この日は晩秋の日射しに誘われて、お父さんが占領することになった。

山梨県ご出身の興石甲子夫さんは、小さいころから山を眺めて育った。しかし成長するにつれ生活の基盤は都会へと移ったが、いつからか「やがては山に住みたい」と思い始めたと同想する。そのきっかけとなったのが趣味の山登り。仕事のかたわら山岳会に所属し、いくつもの山を乗り越え「最終の住処は山の近く」と考えるようになったのだという。

「雪が少なくて近くに山があり、松本よりも北に位置するところ…、それが立地の条件でした。それと温泉があれば申し分なし(笑)」

具体的な土地のイメージができ上がったのは、3〜4年前に燕岳を縦走したときだったという。そのとき穂高の自然に魅せられ、積極的に土地探しを始めてこの地と巡り合ったのだとか。



● 山小屋風の開放感と、永住仕様の落ち着いた感を兼ね備えたリビング・ダイニングスペース。簡単な食事はキッチンカウンターで、みんなで食事を楽しむときはリビングのテーブルを囲んで…。使い勝手のよさも考慮されている。

● 床の高さを同じにしてあるので、リビングからそのまま和室に入出りできる。

● 階段はリビングから延びている。キッチンとの境に壁を設けず、柱を立てたため、キッチンが狭く感じることはない。安全性とともに趣味的な美しさも表現されている。



## ひと目で気に入った土地と、 設計事務所との運命的出会い

建物の具体的なイメージは、最初は奥石さんにはなかった。ただ漠然と「木づくりで」と思っていただけだったのだが、それが形になっていったのは、「建てるならログハウスで」という奥様のひと言だったという。

奥石さんと奥様の初江さんが知り合ったのは、やはり山岳会で。奥様の出身が埼玉県ということもあり、奥様のりの山への憧れがあったようだ。

「私自身も木の家がいいと思っていました。あるときスイスに遊びに行くと、そこで見た可愛らしい家のイメージがずっと残っていました。それが少しずつふくらんでいって、主人が山の近くに住みたいと言ったときに、木の家に、ログハウスにと形になっていきました」

と話す奥様。だからログハウス建築を積極的に進めたのは奥様で、奥石さんはそれに誘われるようにイメージを形づくっていったことになる。

「でも、単なる別荘にはしたくなかった。今は都会で仕事をしていますが、やがてはここに永住する予定です。だから、ログハウスとはいえ、それなりの機能や間取りにしたいと考えました」

と、奥石さんは補足する。

初めはログハウスらしく丸太の曲線を生かしたタイプを検討したが、住宅とするにはいささか抵抗があった。そこで角ログを使用したマシンカット・ログハウスを選択した奥石さんご夫妻。さらに条件が一つ。



## ■ 造り付け家具 ■



## ■ システムキッチン ■

最近ではシステムキッチンもログハウスメーカーオリジナルが増えているが、奥石邸に導入されているものは、長野県在住の家具作家、小田時男さんに依頼して作られたもの。テーブルトップにクリを用いた本格的な家具仕様で、棚などの機能部分は使い手の希望に合わせて設計されている。高松建築工房では、造り付け家具のほとんどを小田さんに依頼。

●●キッチンからリビングを望む。和室の障子を開けたときと閉めたときを比べてみたが、室内の閉塞感はさほど感じない。障子から明かりが透けるからだろう。対面式は奥様の希望だったが、使い勝手の悪さと圧迫感を嫌って吊り戸棚は採用しなかったという。

●客間としても使用される和室は、リビングとの一体感を大切にしたい。

●奥石さんが希望した、リビングの吹き抜け空間。ロフトの柱を横に渡すことで、空間に広がりを感じさせる結果に。

●コンパクト＆機能的にまとめられた洗面所と浴室。洗面台も高松建築工房のオリジナル。浴室には温泉が引かれている。

「山の近くに住みたいがためにこの地を選んだわけですから、間取りの基本は山が見えること。それと、玄関から」と奥様。そして「契約の日も車で来ていたら、果たして高松さんと出会えたかどうか…。その意味では、ここに住むことは運命づけられていたのかもかもしれません」と言葉が続く。

そんな運命的な出会いを果たした奥石さんご夫妻と高松建築工房の間で、水住を目的としたログハウスのプランが練られていった。

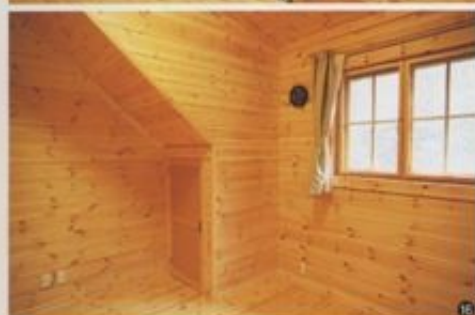
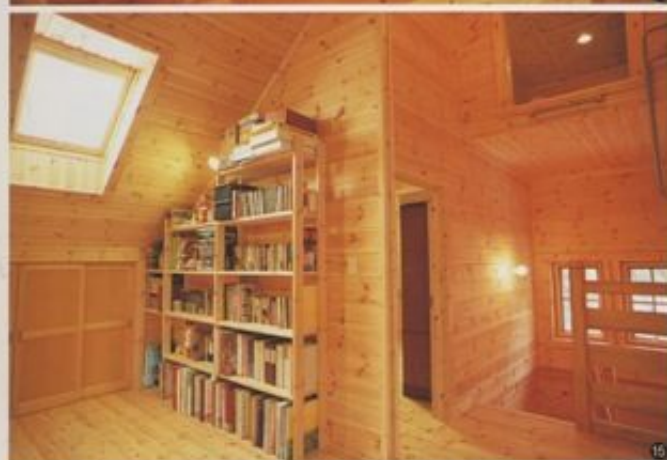
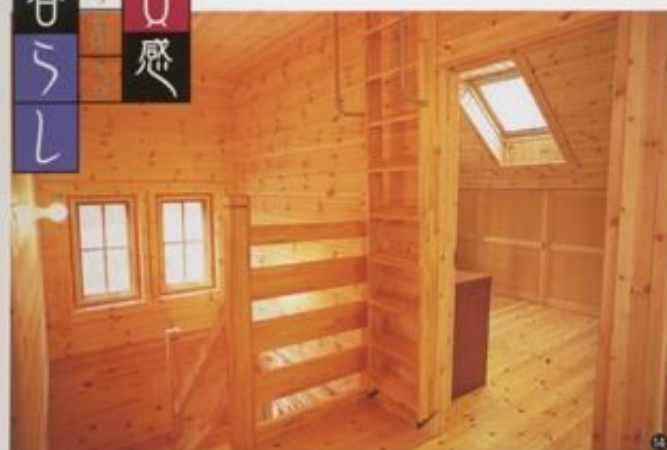
「いつもの車で来ていましたが、たまたまその日は電車を使ったんです。そうしたら駅前にログハウスの設計事務所があるじゃないですか。まさかと思っただけですが、それが高松さんだったんです。なんだか偶然の出会いが重なった気がしますね」

不動産屋さんからも「穂高にも腕のいいログハウスの建築家がいる」と聞いていて、いつかは訪ねようと思っていたんですが、それが高松さんだったんです。ここを手がけてくれた高松建築工房さんだったんです。

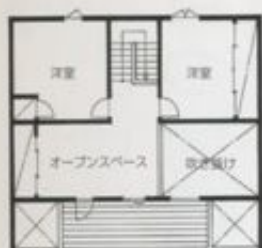
さて、ある日インターネットで土地探しをしていた奥様。偶然ここ有明の地を見つけてすっかり気に入ってしまった。そしてご主人と何度か足を運んでいよいよ契約。

「ロケーションのほかにこだわったのは、建築は地元の家元建築家をお願いしたいということでした。メンテナンスのこともありますが、立地の状況を把握している建築家の強みは何よりも大事だと思ったんです。これは何かログハウスメーカーを検討して得た結論でした」

木の質感  
暮らし



- ロフトのオープンスペース。いずれはここが、奥石さんの書斎コーナーとして使われるのだとか。
- ホールと、そこから続く洋室。
- オープンスペースの一角には造り付けの本棚が。「蔵書を持ち込んだまま、まだ整理がつかなくて(笑)」と奥石さん。屋根が迫っているためどうしてもデッドスペースとなりがちな空間を、こんなふうを利用して。右上に屋根裏収納が見える。どうしても収納が不足がちになりやすいログハウスだが、こんな工夫も参考になりそうだ。
- ロフトにある、もう一つの洋室。
- 奥石さんご夫妻と、この日一緒に遊びに来ていたお嬢さんの佳奈江さん(中学1年)。奥石さんご一家は現在はまだ埼玉県在住だが、ご主人のリタイア後は、ここに永住の予定。



[ロフト]



[1階]

建物データ

延べ床面積	109.95m <sup>2</sup>	1階61.92m <sup>2</sup>
		ロフト48.03m <sup>2</sup>
デッキ(バルコニーなどを含む)	28.99m <sup>2</sup>	
主構造材の種類	欧州アカマツ	
構法の種類	丸太組み構法	
基礎の種類	ベタ基礎	
屋根材	ガルバリウム鋼板	
外壁材	欧州アカマツ、漆喰	
内壁材	欧州アカマツ	
天井材	欧州アカマツ	
床材	欧州アカマツ	
総工費	非公開	
工事始年月	2005年10月	
完成年月	2006年6月	
設計企業	高松建築工房	
施工企業	高松建築工房	
建物使用目的	住宅	

高松さんは、奥石邸に関して、そんなふうに説明してくれた。

「メーカーの考える家ではなく、奥石さんの家を建てる。それがここを設計する上でのテーマでした」

「またリビングと一体感のある和室には3連の障子を引戸として採用し、閉めたときでも明かりが透けるように工夫した。」

入ってすぐ吹き抜け空間がほしかったと話す奥石さん。高松さんにとって山を眺めることができる間取りを考えるのはさほど難しいことではなかったが、希望する位置に吹き抜け空間を作るとなると風除室が設けにくい。そこで玄関だけは在来工法のものに接続することを提案。おかげで外観デザインに躍動感も生まれた。